

2020（令和2）年度 京都大学 入試問題 文系 第2問 解答例

問一

師匠の井伏に多くを教わったと言う太宰に傾倒し、太宰の雰囲気をよく知る筆者は、太宰の死後、井伏と親しく接するにつれ、その雰囲気の幾分かは井伏から伝わったと感じているので、井伏と対座するとき、最も太宰が想起されるから。

* 「太宰への傾倒→太宰の雰囲気を知る」と「井伏に親炙→井伏の雰囲気を知る」の対応関係を明示的に指摘することで、「井伏の雰囲気→最も太宰を想起」の理由説明となる。

問二

井伏は心情を重んじて静かに話すので、向き合って話を聞く者は、自然と引き込まれ、井伏の話す雰囲気に同化されていくから。

* 井伏は「気持で話す」ということの指摘・置換が必要である。

問三

井伏の話はそのまま滋味豊かな随筆や小品になる感があるが、訪問記の執筆は困難であり、文才のない筆者のせいで井伏の話が無駄につまらなくなる恐れがあるということ。

* 井伏＝「豊潤な酒」・筆者＝「水（文才の無さ）」という対照の置換説明が必須である。

問四

井伏は五十歳半ばを過ぎ、若い頃とは違った風貌の美しさがあるようだが、衰えぬ若さがあって年齢相応の恰幅の立派さを持ってあまし、故意に自分が洗練されていないようみせていると思われるほど、逆に洗練されているということ。

* 井伏が「持てあましてある」のは、「自分の立派さ」であって（そう明白に書かれている）、
「自分の若さ」ではないので誤読に注意。「恰幅の立派さ」とは五十半ばを過ぎた男相応の「太った」外観に象徴される重厚さのことを言うのであり、井伏は心身が「若い」から、中高年にふさわしいその重厚さを「持てあます」のである。

* 「それほど～いわばスマート」という逆説の置換説明は必須である。

問五

井伏は、物品への執着が乏しく、日常も簡素を旨としている様子で、子供のころ遊んだ質の悪い紙製のメンコを見て荒れた心が和らぐと言う。筆者もそれを見ているうちに自然と井伏に同化して情感があふれ、心が和らいだということ。

*ここは「住居にあまり凝る気持ちはない」「文房具などもとりわけて好みに執することもない」「ゴッホの絵の複製が貼ってある」（カレンダー付きの安物！）と、一貫して物欲や物へのこだわりのなさに関する記述が続いている。これらをきちんと読んで踏まえ、高価な品ではない「こんなもの」＝「質の悪い厚紙」でできた（出題者による「馬糞紙」の注もヒントになっている）、子供の玩具などに、心を和らげる豊かさを井伏が見出しているのだと読むべきところである。幼児期の故郷を懐かしんでいるのではない。

*さらに、「気持で話す」井伏の話に、筆者の「気持が吸い込まれてゆく」からこそ、「私の胸の中にも」同化されて（泉のやうに）情感があふれ、気持ちが和らぐのである。